

漢羅日報（1998年10月7日）

故郷での初舞台を前にして眠れなかったんだよ
濟州島がこんなに広く美しい島とはしらなかった

母国語で公演できないのが切なくて、孤高な芸の道で得た「生きる感動」を伝えたくて

幼いころから故郷は小さな火山の島という印象をいっていました。車で一時間もあれば、十分一周できると思っていたのですが、こんなに大きな島とおもいませんでした。自然の景色があまりに美しく驚いています。

北部クチャ邑ハンドン里が故郷の濟州島出身・在日同胞の演劇家キム・キュンボン（金均）● 65
歳 芸名・マルセ太郎）氏が「漢羅日報」主催の特別公演のため六五年ぶりに、夢まで見た故郷の地を踏みました。キム氏は四〇余年間舞台生活をおくり「スクリーンのない映画館」という独特な一人芝居を確立、日本の芸能界に大きな反響をよびおこした役者。

彼は九五年に肝臓ガンの宣告を受け、七月には東京の病院で三回目の手術を行い今回の訪韓となった。長くない余生と知り、今回の故郷訪問が最初で最後になるかも知れない。

ちようど民族最大のお祭りである旧盆の連休と重なり、多くの人の歓迎を受けた。故郷の血筋を忘れてはいけなないと、墓参りに同行した親戚が手渡してくれた光山金氏の系譜を感慨深く見入っていた。

六五年ぶりの故郷の訪問と公演を目前に、片思いの恋人に会いに行く気持と同じで、胸がときめき眠ることができなかったという。十七歳で日本に渡った彼の父は、一九四七年、三九歳で他界し、そのため民族教育を受けることができなく、祖国での初公演を母国語でできないのが切なさと、語った。

しかし「民族と国家は別と知っている」彼は、「韓国語ができなくても韓国は母国という考えは変わりなく、変えることはできない」と言い、故国に対して熱い愛情を見せてくれた。彼のこのような祖国感は作品の中にもそのまま投影。在日韓国人の血が自然にとけこんでいる芸として高い評価を得ている。彼はこれに対し「民族性が芸を育ててくれた」といった。

彼は、演劇をはじめた明確な動機はないけれど、高校卒業後有数の劇団七つに応募したが、ことごとく失敗したという苦い経験があり、俳優ではなく芸人としての道を歩むことになったと説明した。つまり、演出家がいて台本とかシナリオで演ずる俳優ではなく、そのような固定されたものがなく全一人で演じる独特な道をすすんできたということだ。こうした芸で、彼が伝えたことのひとつは「生に対する感動」である。

彼は、国際通貨基金（IMF）による経済危機で苦勞している故郷の人たちに対して「経済だけが国の発展を約束するものでない、経済力だけが幸福の存在ではない」と語り、日本の経済を単に真似すべきではないと指摘。成功と幸福ははつきりと違う、幸福を求めるならば貧しさなどいとわなないことが大切だと。

今まで千回を超える公演を行い、日本映画『泥の河』をはじめ『殺陣師段平物語』『無法松の一生』外国映画『アマデウス』『道』『ライムタイト』など十五編のレパートリーがある彼は、機会があれば濟州島の演劇界と交流したい、と希望を明かした。

今回の彼の故郷訪問に対する日本のマスコミの関心は高く、今月末のスペシャル放送のためTBSはドキュメント制作チームを派遣し、ある雑誌社は同行カメラマンを送り、ソウルとチェヂェ（済州）公演はもちろんのこと故郷訪問も取材していた。

夫人との間に二男一女をもうけている彼は、今執筆している作品（イカイノ物語）を来年七月大阪において上演する予定である。

（イ・ユンヒョン記者）

* 翻訳 ペ・ハクテ（裴学泰）